

中國郵政特准掛號認爲新聞紙類 每份零售價0.5元 每月15元 全年150元 郵費在內 廣告刊例另議

# 春燈

2017 May

5  
月号



主宰の句

安立公彦

長閑さのこころ時空に遊びゐて

永き日や真砂女の海を見て飽かず

紅梅の八重のこぼれ日身に安し

春塵をともし手に受け六地藏

鳴くひばり利根の堤を遠く見



# 久保田万太郎の句

## ノイシユヴァンシユタイン城五月の空に童話めく

『流寓抄』昭和二十三年名にし負ふ小籠句や息白し

終戦直後の混乱期に呱呱の声をあげた春燈誌が十周年を迎えた折の感懐の句です。安住敦始め諸先人の献身的努力と、何よりも「余情」の俳句を定着させた万太郎の実力により乗り切った十年間だったのです。うちうちだけの祝という言葉にそのよろこびと自負を感じます。

このような先人の努力を無にすることなく春燈の発展を目指しうちうちの結束を固めようではありませんか。

臼杵游児

久保田万太郎の句

水中花咲かせしまひし淋しさよ

『草の丈』昭和二十七年

新しい水中花を水に入れる時のときめき。一瞬にして大輪となり、色もあでやかに見えて美しい。毎日水を換えて楽しむが、やがては飽きて、忘れてしまう。「滅びの美学」をもたない、造花の哀しさである。

そして、咲かせてしまった無聊感もさることながら、水中花に人の姿を重ねるならば、早々と咲いてしまった人生の佳しさを思わずにはいられない。

浅木ノエ

# 燈下集



○ 陳 妹 蓉

上元の夜空をおよぐ孔明灯  
天灯に願ひ托して飛ばしけり  
外人もランタン飛ばす上元会  
ランタンに願文連ね元宵節  
逢うて見るスマホの友よ月朧

○ 井 上 正 子

宇野千代の「おはん」観劇春の月（岩国高女の先輩）  
啓蟄や母校の土塀破れしまま  
花辛夷美濃の古老の話好き  
蛇穴を出て坪庭の荒れてをり  
鳥雲に賛美歌の中牧師逝く

○ 三 代 川 玲 子

名にし負ふ小籠包や息白し  
戯れの落書消せぬ四温かな  
沈黙の足取り怯ゆ冬の霧  
女靴の乱れ揃へぬ懐手  
切なしや一ヒのクスリに咳きこめり

○ 呉 文 宗

一本の花菜茹でずに飾りけり  
こななにもしづかに降り春の雪  
ふきのたう土の匂の風吹けり  
箸つかひきれいな人やひなまつり  
竹林を抜くる風音鳥雲に

○ 豊谷青峰

五百年の悲話を伝ふる兜梅(全喜庵龍慶寺)

罅割れの仏足石や冴返る

飴色の象牙の根付春灯

童謡の垣根のモデル春落葉(東京・中野)

菜種梅雨黒光りして能登瓦

○ 高埜良子

生かさるる幸せ分かつ年の豆

目深笠の奥や心眼きぎす啼く(大師像)

雨水かな捨て去るものと残すもの

白梅や旧居いきづく万太郎(湯島天神)

長閑やかに影追ふ鳩のリズムかな

○ 吉川隆

子育てに正解はなし露の臺

しばらくは居座るつもり春の風邪

たまさかの雑巾がけや冴返る

二ヶ月の風に惑ふやブーメラン

春の波暫しとどむる舟屋かな

○ 本田保

こころざし新たに春の立ちにけり

風邪ひいてしまひし伊達の薄着かな

薄氷を踏み潰しては興ずる児

春寒し触れてはならぬものに触れ

実朝忌波の碎けて裂けて散る

○ 瀬戸峰子

明日ありといふ幸せの木の芽雨

毀誉褒貶なくともろもろ木々芽吹く

芽吹く木のかたへに生きとし生けるもの

渡り落つ木の芽はげます山の雨

枝ぶりに気負ひを見せず木の芽吹く

○ 今井弘雄

月山の峰まだ白き吊し籠

修二会の火濁世の闇を祓ひけり

学舎の一室灯る春の雪

風暮れて香り移れり沈丁花

ポケットに昔の切符春うらら

○ 竹内慶子

ふくらむ土手愛され殖ゆる福寿草

「授かり」と思へば寧し日脚伸ぶ(乳がん転移)

豆撒も遠くなりけり父もまた

白梅の移り香のせて友の文

体調の一進一退春浅し

○ 清水美子

おさな子の撫つれば光る猫柳

のどけしや横断歩道渡る猫

飛梅の小さき由来碑道真忌

多摩川のさざ波明り梅の園

春日傘すねて甘えて回しけり

○ 片山博介

瀬戸内の海図を展ぐ寒の明

啓蟄やからくり時計の螺子を巻き

山門に貌の彫刻春眠し

黒谷の会津藩墓地雪残る(金輪金戒光明寺)

細路地を駆けて祇園の恋の猫

○ 宮沢治子

ちやんちやんこ夫の碁敵来てをりぬ

赤松の亀甲しるき建国日

春の雷赤子しやつくり止まりけり

受験生の味もそつけもなき返事

人の世の面白可笑し亀の鳴く

○ 府川昭子

春めきしものに綿菓子めきし雲

蝦蟇口に溜まる小銭や日脚伸ぶ

沈丁の眩くやうにふふみそむ

包丁を細かく使ひ雛まつり

ときめきの話に花や春の夜

○ 永島雅子

犬連れに道譲らるるいぬぶぐり

仏壇へ先づ報告す合格子

駐在所に道問ひ入るや春火鉢

暇に立つ幟揺れぬる午祭

黒目浮く有田の鉢のしらをかな

# 当月集

安立 公彦選



○ 佐藤 玲子

待針に旧姓二本針供養

針山の下に秘するや針供養

納骨に赤城おろしの容赦なし

曾孫まで揃ふ梅咲く七七忌

公園の遊具点検春近し

○ 横山 さくら

菜の花や五分遅れの時計塔

春うらら時間通りのバスの列

消印の文字の薄さや花便り

入学す靴墨の蓋きりりと閉め

床の間のひとときは長き黄水仙

○ 持田 信子

蒼天へひかる産毛や辛夷の芽

梅満開スケッチの筆よく走る

ハイタッチ小さき手のひら桃の花

春一番なにをさらつてゆくつもり

北窓を開き身近に鳥語聴く

○ 荒井 ハルエ

残業のビルや余寒の灯をともし

寒明や一気上がるエレベーター

検診を終へて二月の風に入る

白魚の双手に透くるいのちかな

小流れの水音かろし路の臺

○ 永井 恵子

古代より変はらぬものに野火の色

土手に立ち野火の走るを飽かず見て

梅林を抜けて小曲り日豊線

廃井戸の蓋は頑丈雛の壇

三界に家ありてこの菜飯かな



# 春燈の句

安立 公彦選

町中に残る春田や鋤き返す

東京 佐藤まさ子

囀やまだ音程の定まらず

剪定の缺の音や昼下り

紅白梅咲いてベンチの二人かな

豆撒きの新横綱の男ぶり

兵庫 古川 幸子

春の風邪肩に疲れの残りけり

ちぎり絵の糊の匂へり春立つ日

薄氷やモデルハウスの販売中

内裏雛はるばるタイにお迎へす麗子 年寄編遊

バンコク 大口 堂遊

目借時夢見心地の暫しかな

里心つくタイ暮し鳥帰る

水温む母娘いつしか仲直り

梅東風や主なき戸をひそと叩く穂毛 貞徳

神奈川 宮崎 洋

囀や根上りの松をどりだす

千体の地藏や千の風車

きつともう目見えざるひと芽木の雨

ほつれつつ開く金縷梅峽の風

鶉跳ねて山菜莢の金零しけり

枝折戸に始まる茶席梅七分

黒々と幹節くれて梅の春

うぐひすや懐深き薬医門

橋の名に渡しの名残春日影

亀甲の矛先天へ土筆出づ

磧にて古草らしく土まぎる

かうばしき匂厨にはうれん草

うす味に魚煮ふくめ春の雪

山裾のどこか響し野梅咲く

薄氷や明珍火箸の音さやに

木枯や道路工夫に黙礼す

眼鏡替へ四方八方景色春光る

東京 佐俣まさを

東京 小林 文良

兵庫 秋山 薦

埼玉 長谷 仁子



# 余言

安立公彦

村々を次々かくし地吹雪来

園部 露郷

「地吹雪」は、地上に降り積もつた雪が激しい風で空中を乱れ飛ぶ現象。作者の住まいは秋田県湯沢市、雪の深い地域だ。私も若い頃旭川に二年ほど居た。寒気と豪雪は体験済みだが、人は環境が変わると以前の体験は忘却する。

この句。「村々を次々かくし」に、凄まじい地吹雪の景が在りありと浮かぶ。同時発表の、〈暖冬と言へども羽後の雪五尺〉は、豪雪地帯の日常詠。しかし両句とも、リアルな表現に、嘆きの感じられないのが素晴らしい。

手鏡や雛にまみゆる紅をさす

太田 慶子

「雛にまみゆる紅をさす」は、表現も整い思いも深い。その「雛」は、へあなたのし仏間たちまぢ雛の間、の句の通り、かねての仏間に雛壇が設えてあるもの。雛の並ぶ場所としては意義ふかい。

今、作者はその雛に会うべく、手鏡をかざしてゆつくり

と紅を差す。思うに女性にとつては幸せなひと時だろう。雛については、はるか以前、柳川で見た立花家に伝わる享保雛の優雅さが忘れられない。

節忌の土の目覚めてゐたりけり

木多芙美子

長塚節の忌日は二月八日、大正四年三十六歳で死去。子規に短歌を学び、根岸短歌会を伊藤左千夫らと指導して来た。郷里茨城を舞台に農民の生活を描いた『土』の執筆は三十一歳の時。この『土』は今も読み継がれている。

節忌の二月八日は立春を過ぎて四日頃。文字通り春は名目の寒さの中である。しかし、ものの芽は着実に育ち、それらを養う土壌は確と生育を始める。「土の目覚め」である。下五を「ゐたりけり」で締めているのも佳い。

四温かな転移なき身をいとほしむ

小菅 礼子

私たちはそれぞれに「病」を抱え、その治療のために手術などの処置を受ける。処置が正しければその治療は成功したことになるが、治療を受ける人により、治療に当たる医師により、またその病の特殊性により完治出来ない例もあるだろう。それを如何に受取るかは永遠の課題である。

今作者は、往時の病を振り返り、「転移なき」わが身を

いとおしむのである。それは日頃の養生の故か。「四温かな」に試練を越えた安らぎの思いが仄見える。

三寒四温七は幸呼ぶ数と謂ふ 呂 秀文

一読「七は幸呼ぶ数」に共感を覚える。歳時記には、新年の七福神詣がある。初冬の七五三も幸呼ぶ行事だ。子供が生まれて七日目の御七夜。七曜は生活そのもの。私たちがとっては教典とも言うべき俳諧七部集。そしてこの七は、野球における、「ラッキー・セブン」の語を為す。

この句、その「七」を呼ぶべく、「三寒四温」を上五に置いたのが一句のリズムを助ける。「三寒四温七は」の読みは、読んでいて心地良い調べとなっている。

こんなにもしづかに降り春の雪 三代川玲子

「春の雪」は何よりも語感が佳い。淡雪、牡丹雪、斑雪、雪の果、それぞれ春降る雪の称だが、「春の雪」の、この和やかな語感、言葉の持つ余情、それらは「春の雪」でないと味わうことは出来ない。

この句、その「春の雪」を座五に据えて、「こんなにもしづかに降り」と表現したのがみごとと言えよう。「こんなにも」は、目の前の景であるとともに、自らの心に呼びかける言葉でもある。出色の一句だ。

青き踏む手に測距儀と棒杭と 懸林喜代次

「測距儀」は距離を測定する器械。工事を始める土地の測量、工事中の各部の測量、そういうものに「測距儀」は欠かせないと聞く。また併行して、レベルやトランシットもある。角度の測定は、垂直を基本とする建築物にとつては原則であろう。五重塔のみごとな直立は建築技術の古典だ。「棒杭」はそういう測定器具の相方となるものか。作者の仕事は建築に関連するのだろうか。距離の測定中ふと足許を見ると、野辺には若草が萌え出ている。まさに「青き踏む」だ。物心一如という言葉がある。作者にとつては、測量即ち踏青という、充足のひとつときと言えよう。

詩集閉つ春の光を葉とし 川崎真樹子

二月の本部句会でこの句を見て感じ入った。野見山朱鳥に、へうれしきは春のひかりを手に拗む」という晩年の句があるが、この句は朱鳥の句に通うものを持っている。「詩集」の如何は問わない。「春の光を葉とし」は幾度読んでも動かない。「春光」という感覚的な明るさを、実体のある「葉」とする発想がみごとだ。なお、「葉」は、「枝折」から転じたもの。古くは木片を挿むこともあり、それが「枝折」となり「葉」となった、とある。